

沖縄新基地建設をめぐるダンプと市民の対立

国全体の問題として考えよう

誰のため？何のため？

沖縄県名護市辺野古沖での米軍新基地建設をめぐる動きが本格化しています。

四月以降連日数十台のダンプがキャンパスシユワブゲートから資材を搬入、工事を反対する市民から強い抗議を受けています。

県本部では四月一日〜一日の三日間現地座り込みに参加、本土マスコミが取り上げない現状を報告し基地問題を考えたいと思います。

「ダンプは帰れ！」



資材を搬入するダンプ労働者と反対派市民との対立は激化。ダンプ労働者は業務命令に従わざるを得ません。



先頭ダンプは撮影も強いられています。



違法工事ヤメロ！



機動隊に警護されてダンプ入場



機動隊は座り込む市民を暴力で「ごぼう抜き」を負傷者が続出しています。「法治国家」とは本土限定か。



ゲート前にダンプが到着すると、反対派市民はゲート前でスクラムを組んで進入を阻止、機動隊が一人一人を暴力的に強制排除（ごぼう抜き）し隔離します。

「ダンプは帰れ！」市民は進入するダンプを大声で非難します。市民を睨みつける運転手、冷笑する運転手、つらそうな運転手、県民同士の対立関係が深まっています。

不公平な基地負担

国内の米軍関連施設のうち74%が狭い沖縄に集中しています。太平洋戦争末期本土の防波堤として地上戦に巻き込まれ20万人もの犠牲者を出し、戦後70年以上日本全体のために米国の「植民地」状態を強いられています。我々本土の人間が基地問題と正面から向き合おうことが求められています。

日米安保体制を維持するのであれば、沖縄に偏っている基地負担を国全体で分担することを本気で考える時期ではないでしょうか。

例えば、本県南部の広大な渡良瀬遊水地を基地を受け入れることを想定します。赤麻小学校の子どもたちは、エントリ戦闘機の爆音の下で授業を受け、佐野アウトレット周辺では米兵による事件事故が増加、そしてある日突然オスグレイが板倉東洋大学キャンパスに墜落・・・そんなリスクを受け入れることはできません。遠い南の島でお願いします・・・。

私たちのなかにあるであろう沖縄へのこの差別意識に向き合わない限り、日米両政府は安泰だと思えました。

【新基地問題とは】

一九九五年米兵少女暴行事件を契機に普天間基地返還要求が高まり、紆余曲折を経て名護市辺野古沖への移設が決定しました。

普天間基地は住宅密集地にあり「世界一危険な基地」と呼ばれています。政府は「普天間基地の危険を除去する必要がある」と辺野古への移設を強行しようとしています。

昨年十二月、基地建設をめぐる最高裁は国の主張を認め沖縄県の敗訴が確定。政府は今年から本格工事を強行しようとしています。



専門家の間では新基地の必要性自体が疑問視されています。沖縄にはすでに極東最大の嘉手納空軍基地があり、山口県の岩国基地は今年から最新鋭ステルス機を配備するなど機能を強化、さらに自衛隊も